

19 済生学舎の女子医学教育及び

その周辺

唐 沢 信 安

(一) 高橋瑞子の入学と女子医学生

済生学舎は、男子の医学教育の速成を目的に、明治九年四月九日に創立された医学校である。

ところが、明治十七年十二月、高橋瑞子が入学を求めて、済生学舎の舎長長谷川泰の門前に、三日三晩立ち続けて懇願し、許可を得た。以来済生学舎の女子医学教育が始まった。高橋瑞子は、男子学生の中で独り勉学に専念し、明治十八年春、医術開業前期試験に合格し、明治二十年四月、三十六歳で後期試験の難関を経て女医になっている。

やがて、荻野吟子、生沢クノに次いで、日本で三番目の女医となり、その後種々の活躍をした。以来、日本の女医志願者の殆どが、済生学舎の門を潜って医師となつ

ている。その数約百名と云われるが、現在判明せるものは、明治三十四年迄に五十九名の女医が誕生している。

(二) 深萱むね、福井繁子、山内ヨネについて

次に岐阜県土肥郡高山村出身の深萱むねについて述べることにする。むねは十七歳の時上京し、済生学舎に入學した。明治二十四年に医術開業後期試験に合格し、日本で七番目の女医となっている。むねは済生学舎の物理学、外科学講師丸茂文良と結婚し、明治二十九年に、我國初のX線実験及び臨床講義を行なった時に、丸茂の助手を務めた女性である。

続いて岡山県真庭郡久世町出身の福井繁子について述べる。繁子は明治二十三年、十七歳の時上京し、済生学舎に入學している(吉岡弥生と同級生)。五年後の明治二十七年三月に医師の免許を得て、明治三十八年にドイツに留學し、マールブルグ大学のオットー教授の指導を得て、産婦人科の研究を重ね、三年にしてドクトル・メヂチーネの学位を得ている。更に昭和二年から大阪帝国大学にて研究し、昭和七年同校では女子初の医学博士の称号を与えられた。

更に野口英世の初恋の人であった山内ヨネについて報告する。山内ヨネは、明治十四年一月に福島県会津若松市に生れ、父山内立真の忘れ形見で、幼くして父親をうしない、志を立てて会津女学校を卒業後に済生学舎に入り、明治三十四年に前期試験に合格して明治三十八年に後期試験に及第す。其の間順天堂医院で修業して小児科三省堂医院を若松市大町に開設した。後の話に依れば、山内家には野口英世からの恋文が沢山残されていたと伝え聞いている。

(三) 済生学舎の女子医学生への拒絶

明治三十三年長谷川泰は、「専門学校令」の下で、済生学舎から単科医科大学への設立計画を立てていた。

そこで「風紀上の問題」を口実にして、女子医学生への入学を拒絶した。更に三十四年には在学中の女子医学生、前期生三十名、後期生十四名の学生全員に退学を命じた。退学を通告された女子学生は、石川清忠講師に懇願し、神田三崎町の東京齒科医学院の一室を借りて「女子医学研修所」を明治三十四年の春開校し、勉学を続けた。

(四) 東京女医学校の創立

吉岡（旧姓鷺山）弥生は静岡県小笠郡土方村おがさひじかたの出身で、明治二十二年に十九歳で上京し、明治二十五年三月に済生学舎を卒業し、日本で二十七番目の女医となった。済生学舎の女子学生拒絶を機会に、吉岡弥生は明治三十三年十二月五日に、至誠医院の一室で「東京女医学校」の創設を夫の吉岡荒太の助けを借りて実施した。

(五) 済生学舎廃校後の女子医学教育

済生学舎廃校後に、七百名の学生の救済の目的で設立された「私立東京医学校」「私立日本医学校」の両校共に女子医学教育に尽力した。然し、明治四十三年に両校は合併し、同明治四十四年に、医学専門学校に昇格するために女子医学教育は廃止された。

（日本医科大学）